
ナナナナナナナナナナナナナナ

魔法使い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナナナナナナナナナナナナナ

【Nコード】

N4494X

【作者名】

魔法使い

【あらすじ】

私、奈々川ナナ。女はデュエルキングになれない。だから私は男装して奈々川ユウタと名乗ってこの学園に入ることに決めたんだ。私が女だつてばれないようにするのは大変だけど絶対にはばれてはいけない。でも、私が目立ちすぎて変な人ばっかが私と関わってきて……。

ブ
ロ
ロ
ロ
ロ
ロ
ロ
ロ
ロ
ー
グ
(**前書き**)

適
当
に
思
い
つ
い
た
ネ
タ

頑
張
る
よ
ん

ブooooooooooooo

そして季節は長い冬を終えて4月の10日。僕はこれから始まるうとする学園生活の為の準備をしていた。

「よいしょっと…」

入学のしたくを終えると僕は独り言のようにつぶやきながら玄関に並べてある靴に手を掛けた。ちよっと寂しいけど今日で僕のふるさとともお別れだ。僕はある思いを胸にして家を走るように飛び出した。

僕の将来の夢は武藤遊戯、遊城十代、不動遊星のような誰もが尊敬できるようなデュエルキングになることだ。

デュエルキングの道は果てしない。それでも長い道のりを超えることができた人がなれるのがこのデュエルキングだ。周りに無謀だと言われてもいい。それでも僕は大切な人に約束をしたんだ。それに僕は一度も約束を破ったことはない。絶対にデュエルキングになつてやる！

「やよなら…」

家の前に立つてお辞儀をした。これでこの家とはお別れだ。家族も皆ここには暮らしていないしこの家はそのうちなくなってしまうだろう。そして家から数歩歩いた時に何かに気が付いた。

「あ！！下着忘れてる！！」

僕は急いで家に帰ると一目散にタンスから女性用のブラを取り出す。それを男性用のデュエルアカデミアの制服の自分の胸にあわせてみた。何かが変だ。

「そつえば私…。男の子なんだ…。もうこんなの必要ないのかな…」

私の名前は奈々川ナナ。女の子なのだ。それなのに男装をしているのはなぜかって？これを話すのは深い理由がある。でも私が女だっていうことが絶対にこれから始まる学園生活ではいけない。

「確か1ヶ月前に買ったこのブラウスってお気に入りになんだよねえ！まだ時間あるからちよつとだけ着てみようつと。最後だからいいよねー！」

じつくりと大きな鏡を見て着替えた姿を全身がはつきりと写るようしながらポーズを決めた。

「うーん。それにしてもまた胸が大きくなった気がする…」

自分の胸を触りながらその膨らみを鏡で見ながら考える。女を象徴するこの胸をどう隠すかが問題だ。膨らんでいることが少しでも見られると一瞬で女だということがばれる。

「まだ時間あるよなあ…。まだお気に入りの洋服いっぱいから順番に着よう」と

女はデュエルキングになれたという前例がない。かつてデュエルで栄光になった人物全ては男だった。女でもデュエルは強い人はいるが大人になるに連れてデュエルに離れていく。そもそも世間は女だからという理由で忘れられる。だから私は女を捨てて男になったんだ。これなら夢をかなえられることができる。この方法ならデュエルキングになれるかもしれない。

「うわあああああああああああああ」

やばいから私は走る。今日は大切な日だっていうのに遅刻する。今日が最後の女性でいられる日だと思つてのんびり着替えしまくつてたからだ。やばいぞこれ。

「セーフ！セーフだよー！」

試験会場に付くと先生が立っていた。私は焦りながらも自分が大丈夫だということを証明させるように努力する。

「ギリギリセーフだよ。あと3分遅れてたら危なかったな」

「やったー！私、開始早々遅刻するっていう目立つ子にはならなくてよかったー」

「それは良かった。良かった」

先生も嬉しそうな顔で私を歓迎の言葉で励ましてくれた。私は目をキラキラさせながら会話をさらに進めていく。調子に乗って興奮した私は早速言われてはいけない過ちを侵してしまう。

「よかったあ…。私、ゆっくり着替えててちょっと油断してたのよね」

「君、受験番号と名前言ってなかったね」

「私、学生番号202番。奈々川ユウタ」

先生はポカッと穴が開いたような顔をしている。学生番号を私は言っただけなのに先生は驚いたような表情でこちらを見ている。何事だと私は思った。

「あれ、名前…？君、女の子じゃないのか？」

衝撃だった。いきなりばれてしまったのか？私という言葉を連呼するだけで男になろうと努力しているのにはれるなんて。

「ち、違う。僕、ネクタイの結び方にちょっとだけ苦戦してて練習していただけなんだ。こうやって…こうやるのができないんだよな

あ……」

急いで同世代の高校生が言いそうな台詞を私は作った。こんなところから始まる私の学園生活が終わるなんて考えられない。私は男なんだ。

「……。わざわざ確認を取るまでもなくこの写真で登録してある通りだから男だよな。なんか君、私って言ったから一瞬女の子かと思っただよ。それにしても君、女の子みたいで可愛いな」

「勘違いしないでくださいよ。僕が女に見えるなんて先生は変体じゃないんですか！」

「すまん。最近他の先生にお前はシヨタコンだろって言われてるから勘違いされないように気をつけないな」

やばい……。危なかったけどギリギリセーフだった。それにしても一人称を間違えるだけでも女の子っぽく見られてしまうのか？今は周りにいるのは先生で良かったものの学校ではちょっとしたこと命取りになりそうだ。

「おっと。そろそろ時間のようだな。会場に入らないと間に合わないぞ」

「先生が僕に無駄話するからでしょ！」

「すまんすまん」

あのシヨタコン先生が教えてもらった通りに会場に進んでいくと500人を超える生徒達が座っている。自分の席に座って少し立つと試験の先生が来て筆記の説明が始まった。これから始まるのはクラス分けのための筆記試験だ。もちろん私はデュエルキングになる

ためだからこんな簡単な問題に負けるわけにはいかない。それに何のために今まで勉強していたんだ。

第1話 『モテモテの学園生活』（前書き）

主人公がモテて女子にハーレムになる展開はよくあること
それでも主人公のナナちゃんは女の子だけ。

第1話 『モテモテの学園生活』

私が女の子だっていうことがバレたらデュエルキングになるという夢がかなえられなくなってしまう。絶対にバレるわけにはいかない。学校でもなるべく無口で目立たないようにしよう。

「それでは次に新生学生代表による挨拶です！1年A組。奈々川ユウタ君！！」

どうやら私の成績は1年生の中でトップらしく新生代表に選ばれてしまったらしい。そこで私は代表の挨拶をすることになったのだが私が歩くと今まで静かだった体育館が急にざわめきの声になってしまう。

「これって試験が一位の人が挨拶をするんでしょ？」

「あの子美少年じゃない？これがうわさのイケメン？」

周りの学生達による私語が私の耳に聞こえる。目立たないと宣言したはずなのにこんな結果になってしまったてすごい恥ずかしい。私はこんなことが起きるなんて予想外だった。

入学式が終えて自分の席に座る。なんか周りがざわついていてどうも私のほうを向いているようだ。なぜか私のことで周りは会話をしているみたいだった。特にたくさんの女性の視線が目立つ。

「すごいねー！。あんな綺麗な顔をした男の子なんか見たことない」

「ちょっと加奈子。声かけてきなさいよ」

「やだよー。恥ずかしいったらー！。そっちこそ声を掛けなさいよー」

「無理よ！絶対に無理だつて！」

「くそつー！顔がいいからつて女の子にモテモテかよ！ふざけやがつてー！」

「神様は不幸だよなあ。なんで同じ男なのにこんなに天と地の差が激しいんだ」

男の格好をしているだけなのにこんなに女の子にもてるなんて…。でもあまり嬉しくないんだが。

これからどうしたらいいんだろう。私はなぜかクラス中の注目になっちゃったし…。やっぱりこれから男の友達も作らないといけないのかな？どうしよう私…。男の子すごい苦手なのに。

「なあ。奈々川ってどんなデッキを使うのか？」

「……。え？」

急に男の人に話しかけられた。ちょっとびっくりしたので戸惑っ

ている。

「だからどんなデッキを使うのかなって？何か奈々川ってこの辺で見ない人だからさ」

私が普通に女の格好をしているときでも男の子にあまりしゃべりかけて貰うという機会がないからちょっとだけ緊張する。

「なるほどね。奈々川は電車で2時間も掛かるところから来ているのか。何でわざわざこの高校に来たんだ？」

「そう…。デュエルが強い高校だって聞いたからここにやってきたんだ」

それでも男の人達は私に大してやさしく接してくれた。

「やっぱり筆記試験強い奴はデュエルも強いのかよ…」

「僕はデュエルだけは自信があるんだ。誰にも負けない自信がある。将来の夢はデュエルキングになることなんだ」

「何かすごい奴と友達になれそうだな。俺の名は宮城ケン。何かある都道府県と間違えられそうだから宮崎でもケンでも苗字か名前のどちらかを呼んでくれると嬉しい」

良かった。私、なんだか男の人と仲良くできてる。良かった良かった。こんなところで仲良くできるなんて。どうやら皆言っている人そうで安心できそうだな。

「ちょっと僕、トイレに行きたいから行ってくるね！」

「じゃあ俺も一緒に行くぜ！」

「ええ……………!?!」

何で…トイレに行くだけなのについてくるの？もしかして男の人って一緒にするものなの？女の子同士でも行くっていうこと自体あまりないっていうのに。

「奈々川がトイレに行くってさ！」

「本当に…！」

「俺も付いてくるぜ…！」

「何でそんなについてくるの…！」

ただおしっこをするっていうだけに私の跡を廊下で男達が4人ほどついてくる。何かすごい緊張する。私はゆっくり歩きながらトイレに向かおうと左に曲がった。

「おい……。奈々川…。そこは女子トイレだぞ…」

「お前……。まさか………」

そうだ…。私はもう男なんだった。忘れてたよ。だとしたら男子トイレを使えっていうのか！！嫌な予感がする。まさかばれる…？

「ごめん。ちょっと前見てなかった」

「嘘つくなよ。お前、一直線で女子トイレに入ろうとしてたぞ」

注意されて私は生まれて初めて男子トイレというものに入った。入ってすぐに見たくないものが見えた。男子が立って便器にくっつくような距離でシューっという音と共に何かを出している。これが男の人の……。

「どうしたんだ？奈々川…！」

やばい…。私が変わってということがわかる。私がばれないように

するという選択肢はただ一つ。ここに逃げるしかないのだ。

「おい！見るよ！あの奈々川が個室に入ったぞ」

「どうやら天才でもお腹が痛くなるみたいだな」

「ハハハハハ。ウンコは家でして来いよ！！馬鹿じゃねえの！！」

どうして…。私はトイレにいったただけなのに……。男なんて嫌いだ。

「神崎ミカだ！！」

「あの人って何なんですか？」

「か、神崎ってあの現役プロリーグの…」

「確か先月、プロのリーグ戦で2位だったらしいな」

「ってか…。テレビで見るより可愛いな」

私がトイレから出ると今度はすごい人が廊下を歩いている。容姿は完璧でかなり美人っていう分類に入る完璧人間だ。この子はデュエルは強くても僕が目指しているデュエルキングにはなれない。理由は女性の力では無理だからだ。それでも私はこの子は尊敬する。だって私が目指すべきライバルだもの。

「サインもらせるかな？俺の妹が君のファンみたいでほしがっているみたいなんだ」

男の集団のうちの一人が前に出てきて神崎さんの前に現れる。

「あつ。ずるいぞ！！あいつ。抜けやがったな！」

「はあ……」

神崎さんがため息をはく。どうやら呆れ顔で断りを入れて説明をしたようだ。

「これで家族をダシにして私に持ちかけてくる人はこれでちょうど50人目……。ごめんね」

「ギクッ……」

「校長先生にこれからずっと学園にいるんだからサインはしないようにって言われているの。それにね。いいものを見つけちゃったから……」

「いいものって……」

断られた男子はショックで少し石像のように止まった。どうやらどうでもいい一般人には神崎さんの目には入らないみたいだ。

「そういえばここにいてのって奈々川ユウタくんだよな」

「そ、そうだけど」

「顔と頭がいいだけで神崎のほうから離しかけてもらえるのかよ！
！ちくしょー」

私はなぜか断られた男の子とは違って話しかけてきた。

「君、この学校って進学校の癖にトップの成績ってすごいねー」
「……………」

褒められたけど私は言葉はでなかった。

「まあ、私が特特生じゃなかったら君は2位だったんでしょうけど
ねー！うふふふ……。ついに見つけた！私と釣り合いそうな男の
子」

「私、あなたとお付き合いしてあげる」
「いや、結構だ」

「！？」

「即断した！しかも今の回答一秒も掛かってなかったぞ！」

「…………」。私、初めて告白されたよ。しかも女の人にとって…
私は女なのに。」

「これは一体どういうことなの？」

神崎さんはすごく戸惑っている。私の判断はしょうがないのにす
ごい落ち込んでいるみたいだ。

「あ、『結構だ』。だと肯定の意味になるからわかりずらかったか？ だったら『お断りするよ』」

私かとどめを指すと神崎さんはさらに静まり返った。

「なんと…。あの神崎ミカを悪徳セールス扱いにしやがった！」

でもあまりにもかわいそうだったので

「でも、友達でいいなら喜んで！」

と言ってあげると、

「あなた…。私が…誰だかわかっているの？ 今まで私が…何百人の人の告白を断ったと思ってるの？…」

そんなことを言われても…。しょうがないものはしょうがないのに。

「その私がようやく好みの男の子を見つけたのに…。自分から声を掛けたのに…。自分から声を掛けるなんて人生で初めてのことなんだからね！ こんな屈辱初めてよ」

何かすごいかわいそうになってきた。私がもし、好きな男の人ができて断られたらこんな悔しい思いになっちゃうのかな。

「でも、覚えておきなさい！ 私、あきらめないから！ 覚えておきなさいよ」

神崎さんはそのまま私に振られてどっかに行ってしまった。ちよ

つと緊張したけどこれでよかったのかな？でも可哀想だったからあとで謝った方がいいのかな？

「すごいな！お前！なかなかやるじゃないか！」

「あの神崎ミカを振るなんてそう簡単にできるもんじゃないぜ！」
「ちょ…。ちよつと…」

私の周りに男の人がいっぱい囲む。なぜかは知らないが10人くらいで胴上げされた。そして私のことは一日にして神崎ミカを振ったということでは学校中の有名になってしまったようだ。

そして体育の時間。私は男子の中に混じってバスケットをするので、女の私は男の力には勝てないと思ったのだがそんなことはなかった。私は中学生のころバスケット部だったのでむしろ得意の分類だ。いつも以上に体が軽いようでスムーズに仲間とパスの連携が取れた。そして私は大きくジャンプすると華麗にダンクが決まった…。

「きゃーーーー。ユウタ様ーーーーーーー」

「きゃあああああああああああ」

「ユウタ様ーーーーーーー。かっこいい〜」

「ありえねえよ…。女子の奴、入学したばっかの奈々川をもつ」ユ

ウタ様』だぜ」

「だ、 Dankなんて初めてみたよ…」

たくさんの男子の嫉妬と女子の『きゃー』という声が聞こえる。

「はあ…」

私はため息を吐いた。私はこんなキャラじゃないのに。どうやら私はこのキャラを残りの3年間続けるとなるとかなり辛いプレッシャーになるだろう。私の性格からしてもっとドジっ子というキャラに本当はなりたかった。

「お前はいいよなあ…。ちらほら女子にされて。俺なんか一度もこんなにモテたことないぜ」

「僕はこんなキャラを演じるなんてコリゴリだよ。本当は普通の高校生になりたかったんだけどなあ」

本当は普通の女子高生になりたかったんだけど。可愛い制服を着て女の子同士でこうやって『きゃーきゃー』言う生活。でも諦めるしかない。私はデュエルキングになるんだ。こんなことでくじけるわけにはいかないんだ。

体育のあとは酷い目にあつた。

他のクラス含む20人の女子が私の裸を見たいと言って追いかけてきたのだ。一部の人はカメラを持っていてかなりの重症だと思つた。

私に親切に助けしてくれる男子はこの女の症状を腐った女と書いて腐女子というらしい。初めてこの言葉を聞いた。

必死で私は女子の集団を逃げ切った。途中で靴を履き替えるべくために下駄箱を開くと大量の何かが雪崩のごとく出てきたのだ。

どうやらそれは私宛のラブレターだった。しかもそれは数え切れないような量。漫画やアニメで見たようなことが本当に現実で起こっているのだからびっくりしたけど。

靴を履き替えるともしものことがあると行けないので着替えを持ちながら体育館の裏側に面倒だけど態々着替えに行った。

「やっぱいちいちここで着替えないと行けないのか…。男子と一緒に着替えたら女つてことがばれそうで怖いよ…」

辺りをキョロキョロして周りをいないことを確かめると私は短パンを脱いだ。あの女子達のことだからどっかで隠れてそうで怖いけどこんな目立たないところに誰も来るわけない。

女だとバレないように胸を縮ませるコルセットがさつき運動したせいで汗で匂って変な感じだ。ベトベトしてるから脱ぎたいけど大変だからやめよう。

それにもしもの為にパンツもトランクスに変えるべきだけどスーナーするから履けないんだよなあ…。

「えっ!?!」

突然誰かがここを歩いているような音がした。私の着替えが見られてはいけないと急いで隠れようとするがすでに遅かった。

「あ、あなた…。どうして女性物の下着を履いてるの?」

「神崎……さん。何でここに……」

これで終わりだ。こんなにも早くばれてしまうなんて……。

第2話 『僕は変態だ』（前書き）

・主人公を告白した人の名前を変えた
ユウタと被ってて間際らしかったので変えました

・前回、いろいろと誤字が酷い
今回も酷いと思う

・タイトル

1度でもいいから女子に『僕は変態だ！（キリッ）』って言うって
みたいですね

第2話 『僕は変態だ』

「何で神崎さん…。ここに居るの？」

「私はあなたと同じように授業中、目立つのが嫌いだからたまたまここに隠れようとしただけよ。そっちこそ何してるのよ？」

体育館の裏。誰もいないと思っていたはずなのに早くも女性用の下着をしている私は神崎ミカにバレてしまったのだ。

誰にも絶対にこのことはバレてはいけないと用心していたはずなのにこんなにもあっさり見つかってしまうなんて…。

「あなたどうして女性物の下着を？」

呆れたのかびっくりしてるのか分からない表情で神崎さんはこちらを見ている。私のことが好きで告白していたのにショックだったんだろうな。

「…まさか…だと思っけど…。あなたって実は…」

これで終わりだ。諦めよう。私は目をつぶって後の台詞を聞き流してた。

「あなた…っでもしかして変体なの？」

「…はあ？」

ばれてないのか？でもマシだ。マシなんだ。問題ない。

ここで女ってバレるってことよりはるかに…。大丈夫だ！私、受け入れるんだ。上等じゃないか。

「ああ。僕は変体だ！！」

「……そう…。ユウタは女装が趣味だったんだ…」

すごい冷たそうな残念そうな表情をしている。

告白を振った相手が女装を趣味としているってことになってるけど女ってばれるよりはマシだ。このまま続けるぞ！

「僕は女装をするのが好きなんだ」

「あんた変態の癖に私を振ったんだ…」

よし。このまま攻めとおせばこの状況を打破できるぞ！！私が変なキャラになってもいい。

「…。すまない…」

そう思って安心したそのときだった。

「あなた！私の奴隷決定ね！！」

「は、はあああ！？」

「決定いー！。決定ね！あなたはもう、私の言いなりなの」
「………」

「よろしくね！」

最悪だ。余計にひどいことになってる気がする。

「だってあなた。女装が趣味って私がばらしたら学校中に広まっちゃうのよ。あなただってばれるわけにはいかないでしょ」

「そうだけど…」

「だったらこれから私の言うことを聞きなさいね。女装の趣味を直すために、これからあなたは私の魅力を教えてあげるんだから！」

「……。別に女の魅力を教えなくてもいい…」

「何だよ！！男の癖に女の子が好きじゃないっていうの！！じゃあ、ばらすわよ！！」

「そ、それだけはやめてくれ！」

「ならこれから私のことをミカって呼ぶのよ。私もあなたのことをユウタって呼ぶから」

広めるか広めないかは神崎さんに権限がある。最悪だけど彼女の言いなりになつて諦めるしかない。

でも、この学校で羨まれている有名な人と付き合えるなんてちょっとだけ嬉しいかもしれない。でもこれ以上好きになるってことはないと思う。

あのミカの趣味も悪いっちゃ悪いんだけど。

「それにしてもユウタっておっぱいがちょっと膨らんでるんだね」

いきなり私のところに体重を掛けて不意をつくように私の胸を揉んできた。

振り払おうとしたがいきなりだったのでガードできずに変な声を出してしまった。

「きゃ…！！」

「何、女みたいな声出してるのよ。これってやっぱり何か入ってるの？」

「ち、違うよ！君こそ変態じゃないか」

「あらあら。私に指図して言いと思っているのかい？私のスレイプちゃん」

「くっ…！」

これ以上彼女に何かをやっても無駄だと思った私は、いまさらだが下着を隠す急いでさっさと男性用の制服に着替えた。

私がネクタイを慣れた手つきで絞めながら彼女に訴えるためにミカにこう言った。

「なあ、そろそろ学校が終わるころだけど戻らなくていいのか？」

もう、6時間目の授業が終わって辺りは夕日が近い状況になっている。そろそろホームルームも終わって放課後の時間になるはずだ。これを理由に彼女に離れて貰おうとしたのだが彼女は私に離れようとしなない。

「へえー！。そんな適当な理由をつけて私と離れたいの？私、

ユウタの心読めるもん。ここから早く逃げたいんでしょ」

「君ってもしかして…」

心が読める…。まさかだとは思いますが女だっていうこともばれてしまっているのか…。

そんなはずはないのに…。私は冷や汗でワイシャツがびっしょりになりそうなくらいに焦っているのがミカにはわかっていているようだ。

「なーんていうのは嘘だよ。本当かと思った？」

「脅かすなよ…。びっくりしたじゃないか！」

「だってユウタが可愛いからちょっとからくりたかったただけだもん」

やっぱ嘘か。それでも私はちょっとびっくりしたな…。

「ねえ…。放課後。やることがないなら、今ここで私とデュエルしない？」

「…え…。デュエル？」

「やりたくないならやらなくてもいいわよ。あなたの学年1位の實力をちよつとだけ見たかつただけだから」

私はデュエルしたいに決まっている。だって目の前にいるのはプロデュエリストの神崎ミカ。

デュエルキングを目指している私には通過点のために戦いたい。それに私の今の實力も知りたいもの。

「ああ…。いいさ。受けて立つよ。僕は絶対に負けないからな!!」
「いいねー!。その威勢。こつちもやる気出てくるわ」

こんなところで絶対に負けるわけにはいかない。そう決意した私は着替え用のバッグと共に入れてあった場所からデュエルディスクを取り出す。

私は腕に装着して構えた。デュエルディスク…。これは未来の便利なデュエルをスムーズに処理してくれる端末機器だ。

これにカードをプレイすることで本物の実態化するように見える楽しい機能なんだ。これがなしにデュエルするなんてことは考えられない。

「じゃあせつかくだから賭けをしましょうよ」

「ええ…!!」

対戦する準備ができて落ち着いているミカはいきなり衝撃的な発言をした。賭けつて一体どんなことをするのよ…。

「簡単なことよ。ここには誰も来ない…。だからここで私達が起こしたことを内緒にするための駆け引きよ。…どう？面白いでしょ？」
「…。どういうことなの…？」

疑問に思ったがすぐにユウナは話を進めていった…。

「忘れちゃったのかしら？…。あなたは見られたくないものを私に見せてしまった。ユウタは女装が趣味だったっていうことが知られたくないでしょ！だったらあなたが勝ったらこのことを周りに内緒にしてあげる！」

「……。もう、忘れてくれよー!!」

「でも、今だって女物の下着着てるでしょ。私が忘れるわけないじゃない」

「くっ…」

「そしてもう1つのルール。あなたが私に負けたら」

「あなたは私と付き合っつて約束してちょうだい！まだあきらめてないんだから」

「だから無理だ」

私は即断った。

彼女はまだ私のことを諦めてないようであるけど、私は何を言われようが無駄だ。

「何だよ！だったらあなたの秘密をバラすわよ！！」
「…。何度も言う通りにやめてくれよ…」

私は女なんだ。それなのに同じ女と付き合うなんて…。絶対に無理だ…。ありえない。

それなのに負けたら付き合っちゃ…。私は百合に目覚めてしまっ
だろ。まだ私には乙女っていうのがあるのに。

「……。そんなに負けるのが怖いのか？」

「ち…。違う！それに僕だけ不利な条件をつけるなんておかし
い！こんなの無茶だよ」

神崎さんが私の弱みを探ろうとしているけど何か意味が違う。

「なら、もしユウタが負けたとしてもあなたの秘密は絶対にばらさ
ない。だから約束してくれる？」

「…。わかった…。僕は負けない！」

お互いに了解して準備を済ます。お互いにデュエルディスクを向
き合って構えた。

ここで私がデュエルに勝ってしまったえば彼女は私のことを諦めて貰
えるだろうとこのときは思っていた。

第2話 『僕は変態だ』（後書き）

本当はデュエルシーン付きだったんですけどね

デュエルシーン書くのがめんどくさそうだからやめた
長いというのとまとめるときに面倒なのよ

多分、この話書いた勢いですぐ書き終わると思うよん

第3話 『XセイバーVSライトロード』(前書き)

デュエルシーン簡単だろうと思いつつながら黙々と書いてたらいろいろと痛い目にあつた

何でこんなに長くなつちやうのだろうか

そして文字数が増えるわけだから誤字はやっぱりあるよねー

第3話 『XセイバーVSライトロード』

『決闘！！』

ユウタ LP4000

ミカ LP4000

「先行はユウタからでいいわ。後攻はハンデだからこれで勝てば気持ちいいでしょ」

「随分と余裕なんだな」

「舐められてるけど勝てる確立をわざわざ上げてくれたんだ。

先行は有利だ。初手でカードを1枚多くスタートできるから好きなんだよね。私。」

「僕のターン！ドロー。僕は手札からモンスターをセット！カードを2枚伏せてターンを終了するよ」

私がセットしたモンスターは『XX-セイバー ダークソウル』。このカードが墓地に送られた時、デッキからXセイバーを持ってこれる。

まずは罠と一緒に伏せてミカの様子を見るのがこのプレイングは正しいだろうと判断した。

「ふーん。私に恐れをなしてガン伏せしただけなのね。マイスレイプ。じゃあ次は私のターン。今引いた『強欲で謙虚な壺』を発動

する」

「僕のことをスレイプって呼ぶのやめてくれよ」

ミカは手札をじっくりと睨みながら私に挑発してカードをプレイする。

今発動した『強欲で謙虚な壺』は大変貴重と言われながらプロリーグでも必須と呼ばれる高価なカードだ。

めくれたカードは『ソーラーエクステンジ』と『ライトロード・シーフ ライニャン』、『サイクロン』……。

「私はこの中から『ソーラーエクステンジ』を手札に加える。そして『ライトロード・モンク エイリン』を召喚！」

ソリッドビジョンに現れたのは純粹な正義の色をした白い制服を来た猿のような顔をした少女のモンスター。

「まずは手調べにそのモンスターを潰してあげる。バトルよ！『エイリン』でセットモンスターに攻撃！！このカードの効果で戦闘を行ったモンスターはダメージ計算を行わずにデッキに戻る」
「くっ……」

作戦失敗だ。セットしてあった『ダークソウル』がデッキに戻されてしまったことで効果が発動できなくなってしまった。

それにもつと痛いことは墓地に送られなかったことなのでこのカードを蘇生で利用できないことが何よりも私は辛かった。

「カードを1枚伏せてターンを終了させるわ。エンドフェイズ時に『エイリン』の効果でデッキからカードを3枚墓地に送る」

「僕もエンドフェイズ時にカードを発動させるよ。『トウルース・リインフォース』！効果でデッキより『X-セイバー パシウル』

を特殊召喚するよ」

『トウルース・リインフォース』は発動したターン攻撃できないが相手ターンなので関係ない。

むしろデメリットを帳消ししたってことさ。『パシウル』は戦闘破壊されない効果を持つてるから時間稼ぎができるんだけど…。

「『パシウル』を守備で出したようだけど、『エイリン』の目の前には無力よ」

「違うな。僕はただ、壁として呼び出したわけではない。このカードはレベル2のチューナーってことに意味がある。僕のターン!!」

私が狙うのはただひとつさ。

ユウタ

LP：4000

手札：3枚 4枚

場：モンスター

『X-セイバー パシウル』

魔法・罫

セット1枚

ミカ

LP：4000

手札：4枚

場：モンスター

『ライトロード・モンク エイリン』

魔法・罫

セット1枚

「『XX-セイバー ボガーナイト』を通常召喚！このカードの効果により『XX-セイバー フラムナイト』を特殊召喚する」

私がカードをデュエルディスクに2枚を叩きつけると赤いマントを羽織った剣士に続けて金髪姿の小さな剣士が並んで姿を現す。

「次にレベル4の『ボガーナイト』にレベル2の『パシウル』をチューニング！！シンクロ召喚！疾風の剣でフィールドを駆け上げられ！！『XX-セイバー ヒュンレイ』！！」

2体のモンスターがレベルを表す星に変わり、その星が交差するように交わって強い光を発する。その強い光のあとに別のモンスターが出現する。

「『XX-セイバー ヒュンレイ』の効果により伏せカードを3枚まで破壊できる！僕は君のその伏せカードを破壊するよ」
「…。なかなかやるわね」

『ヒュンレイ』が剣から波動を発生させると伏せカードは破壊される。効果で割ったカードは『聖なるバリア-ミラーフォース-』。あの神崎さんの表情を見るからにかなかないカードを破壊したと解釈できるな。

「そしてバトルフェイズに『ヒュンレイ』で『エイリン』に攻撃！
」

『ヒュンレイ』が2つの剣を華麗に使って『エイリン』を粉碎させる。伏せがないから、から空きでいとも簡単に攻撃が通った。

ミカ LP4000 3300

「そして『フラムナイト』でダイレクトアタック!!」

この攻撃も普通に通る。『トラゴエディア』ありそうな気がしたんだけど、この流れからしてなさそう。

ミカ LP3300 2000

「僕はカードを1枚伏せてターン終了」

「ちょっとは楽しめそうね。私のターン! 『ソーラーエクステンジ』を発動。手札から『ライトロード・ウォリアー ガロス』を墓地に送って2枚をドロウ。そしてデッキからカードを2枚落とすわ。」

前のターンに使わずに温存していたカードを使うと『ライトロード・ビースト ウォルフ』がデッキトップから落ちてしまう。

この綺麗な流れを狙ったようにこのターンで使いこなすとはプロのセンスといったところだろうか。

それに『ネクロガードナー』。1度だけ攻撃を無効にするカードもさっきの勢いで落ちたな。なんていう強運の持ち主なんだ…。

「ラッキー！！『ウォルフ』を特殊召喚！さらに『ライトロード・マジシャン ライラ』を召喚！！」

ソリッドビジョンにはライトロードの集団を表す白い服装をした正義の力を持った獣に続けて純粋な祈りをあげようとする女性が出現しようとする。

『ライラ』には守備にすることによって伏せカードを破壊する効果を持っている。だったら…。

「『セイバーホール』発動！Xセイバーがいる時、その召喚を無効にする！！」

これで1対1交換は成立したけど。

でも、神崎さんのことだから相手にうまく罠を回避されたような感じに見えるんだよな。これでこのターンは終わるわけではないし。

「その子は困だったんだけどね。うまく引つかかったみたいね。次は手札のカードを1枚捨てて『死者転生』を発動するよ」
「うまく僕の罠を回避したつもりか！」

『死者蘇生』に似た紋章のカードが発動される。手札のカードを捨てると、あるカードを回収させる。

このカードは伝説とも呼ばれたカード。過去に伝説のデュエリストの武藤遊戯が使ったとか使ってないとか世間では話題になっているけど真実はわからない。

「くっ…。このカード…。いつの間…」

「じゃあ墓地の光と闇を除外してこのカードを特殊召喚する！『カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -』を特殊召喚よ！」

青と金の鎧を着けた光の戦士がこの緊迫したフィールドに現れる。このカードの出現によって場の空気が一揆に重くなったように感じる。

「『ウォルフ』で『フラムナイト』にアタック！」

まず、手始めに正義の野獣が私のモンスターにタックルを仕掛けようとする。

この攻撃も私に効果を使わせる筈なんだけど、使わないよりは使ったほうがマシだ。

「『フラムナイト』の効果！フィールドに存在するとき、1度だけ効果を無効！」

「でもまだ攻撃は終わるわけではない。『カオス・ソルジャー』 - 開闢の使者 - 』で『フラムナイト』に攻撃！！開闢双破斬！！」

開闢の使者と名乗る戦士は剣を円を描くようにして回しながら金髪戦士を切り裂いた。

ユウタ LP4000 2300

「さらに戦闘破壊したことにより、『開闢』の1つ目の効果発動！もう1度続けて攻撃できる。『ヒュンレイ』に攻撃」

私のモンスターが次々と消滅させられていく。

守りには自信があったはずなのに全て消されてしまった。カオスソルジャー……。とてつもなく強い……。

「あらあら、そろそろ決着が付きそうね」

「まだ、僕のライフは0になつたわけではないよ。僕はデュエルキングになるんだ。だからここで負けるわけにはいかない！だから、僕は君より強いってことを証明させてやるんだ！！」

「そのデュエルの姿勢は大事よ。よく覚えなさい」

私は負けたわけではない。プロとの戦いでこのピンチを味わえるなんてとても嬉しい。諦めるわけにはいかないんだ！

「これで私はこのままターンエンドする。ユウタ！かかってらっしゃい！」

「僕のターン！！いくよ！！」

私はデッキの上に手を掛ける。

あの打点3000のモンスターのプレッシャーがハンパないな。簡単に除去できそうな感じがしないが。それに確か除外効果も持っていたな。

私の手札の1枚。本日2枚目の『X-セイバー パシウル』。対ライトロードでは壁という本来の役割が使えずに時間稼ぎにもなりはしない。

でも、私の伏せカードとこのターンのドロウの結果によってはまだワンチャンがあるから諦めない！！必ず勝てるから！！

ユウタ

LP：1600

手札：1枚 2枚

場：モンスター

なし

魔法・罫

伏せ1枚

ミカ

LP：2000

手札：2枚

場：モンスター

『カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -』

『ライトロード・ビースト ウォルフ』

魔法・罫

なし

「よし！！きた！！まずは『X・セイバー パシウル』を通常召喚！！さらに『ガドムズの緊急指令』発動！！」

私は前のターンに腐っていた1枚のカードを使うために準備していたのだ。

『緊急指令』は自分の場にXセイバーがいれば墓地のXセイバーを蘇生できるカード。大量展開が可能なカードだ。これならあのモンスターに勝てる布石ができる。

「また、めんどくさいカードがいっぱい出てきたわね…」

「『XX-セイバー フラムナイト』 『XX-セイバー ヒュンレイ』を墓地から呼び出す。そして僕の場にXセイバーが2体以上存在するから『XX-セイバー フォルトロール』を特殊召喚!!」

新たに現れた自分の長身より大きな剣を持つ『フォルトロール』を中心にこれで私の場にはモンスターが全部で4体。

これから私の攻撃が始まるわけさ!!これで一気に攻めてやるんだから!

「そして『フォルトロール』には墓地のレベル4以下のXセイバーを蘇生する効果を持っている。僕は『ボガーナイト』を特殊召喚するよ」

一応、効果は知っているとと思うが親切にカードの説明をする。私はさらなる展開をしようと心見たのだが、

「そうはさせないわ!!手札の『エフェクト・ヴェーラー』を墓地に送って1ターンだけそのモンスターの効果を無効にする!!」

これで展開は止まってしまったな。もっとモンスターを並べる予定だったのだが。

でも、プラス思考で考えると僕も神崎さんと同じく『エフェクト・ヴェーラー』を使わせたと考えるべきか。むしろ向こうは損しているわけだし。

「レベル6の『XX-セイバー エマーズブレイド』にレベル3の『XX-セイバー フラムナイト』をチューニングするよ。剣の主の王よ。我が元に降臨して巨大な剣を抜け!シンクロ召喚!現れる『XX-セイバー ガトムズ』」

光の先に現れたシンクロモンスターはXセイバーの総司令官と言ったモンスターだ。私の切り札でもあるカードである。

攻撃力はあの『ブルーアイズ』も超える3100だからな。私の場を荒らしつくしてきたモンスターなんか簡単にケチらせられる。

「厄介なモンスターを……」

「さらにレベル6の『Xセイバー ヒュンレイ』にレベル2の『Xセイバー パシウル』をチューニングして『ギガンテック・ファイター』を特殊召喚！このカードは墓地の戦士族1枚に付き攻撃力が1000ポイントアップする」

私はシンクロを經由して大きな巨人のモンスターを呼び出す。打点勝ちをするために呼んだのだが、こんなところでこの効果を使えるとはな。

戦士族のカードは神崎さんの墓地には『エイリン』 『ネクガ』。私の墓地には『フラムナイト』 『パシウル』 『ヒュンレイ』が存在している。

よって5枚だから元々の攻撃力に500プラスして3300だ。

「バトルフェイズ！『ギガンテック・ファイター』で『カオス・ソルジャー』 - 開闢の使者 - に攻撃！！」

大きな巨体を生かして手のひらを広げるとそのまま伝説の戦士をいとも簡単に破壊するソリッドビジョンが映し出される。

ミカ LP2000 1700

「さらに『XXセイバー ガトムズ』で『ライトロード・ピース

ト ウォルフ』を攻撃する!!」

「これは止めないと辛い展開になりそうね。私は墓地の『ネクロ・ガードナー』を取り除いてその攻撃を無効にするわ」

大きな剣で正装服を着た獣のモンスターに切りかかろうとしたが、突然現れた幻影の戦士に阻まれて盾で攻撃を受け流されてしまった。伏せカードがないのに手札、墓地のカードを駆使して私の攻撃を防いだのはすさまじいな…。でも、さらに積み状態にしてやろうか。

「メインフェイズ2に入る。『XX-セイバー ガトムズ』の効果発動!フィールドのXセイバーをリリースすることで相手の手札をランダムに捨てることができる。僕は自身をリリースしてその唯一の手札を墓地に送らせてあげるよ」

「……………。これでいいんでしょ」

何も弱い台詞を吐かずに手札を捨てる神崎さん。

捨てたカードは『ライトロード・エンジェル ケルビム』。ライトロードをリリースすることによって相手のカードを2枚破壊できるカードだ。

『ウォルフ』を残していたってことは次のターンのコストとして返されていただろう。随分と危なかったな。

「僕はこれでターンエンド宣言するよ。これで僕の勝ちは決定したな」

「私のターン!!」

黙々とカードを手札に加える。今まで有利だったのに神崎さんは一気に不利になったんだ。状況は変わりない。

さらに戦士が墓地に送られたことによって攻撃力3400になったモンスターが制圧するなんて普通のデッキでは返しが無理に近い状態なのにどうしてそんなに冷静なんだろう。

ユウタ

LP:1600

手札:0枚

場 : モンスター

『ギガンティック・ファイター』 攻撃力3400

魔法・罫

なし

ミカ

LP:1700

手札:0枚 1枚

場 : モンスター

『ライトロード・ビースト ウォルフ』

魔法・罫

なし

「どっちらこで終わりのようね」

「君は何を言っているんだい？手札1枚でこの状況を打破できる手段なんてありやしないよ」

手札のカードを見て急に表情が明るくなった神崎さん。

こんな状況で逆転されるなんてありえない。絶対にないと私は確信していたのだが、その幻想はすぐに壊されてしまった。

「ライトロードが墓地に4種類ある時、このカードは特殊召喚できる！！『裁きの竜』を特殊召喚！！このカードはライフを1000払うことにより、このカード以外のフィールドのカードを全て破壊する。裁きの光ー！」

「嘘でしょ……。こんなことって……」

ミカ LP1700 700

神々しい髭を生やした竜がフィールドの中央で大きく雄たけびを上げるとフィールド上に稲妻が走った。

私の場の巨人のモンスターが吹き飛ばされていく。

ユウタ LP1600 0

自分の付けているデュエルディスクのライフポイントの表示は0を示した。

「う…う…」

悔しさのあまり私の目には涙が浮かび上がりそうになった。
勝てる自信があったっていつのに…。くそ…。くそ…。何
で…。負けてしまうんだ…。

「僕はデュエルキングになるっていうのに…。こんなところで…
…」

悔しい…。

「ユウター！何で、男の癖に泣いてるのよ！たかがデュエルで負け
たくらいで…」

急に泣き出した私に心配したのか優しい心遣いで神崎さんは接し
てきたけど…。

泣いている私にはぜんぜんその表情に気が付かない。

「……。泣いてないよ……」

「おもいつきり泣いてるじゃないよ。ユウター…」
「ち、違う…」

「いいからこれ渡すからさっさと泣き止みなさいよ。私が泣かした
みたいで誰かに見られたら恥ずかしいでしょ」

女の子らしいピンク色の『ハネクリボー』のキャラクターが描か
れているハンカチを私に渡してくれた。

そうだ…。私は今は女の子じゃなくて男の子の格好をしているん
だった…。こんなところでくじけるわけにはいかない。

『僕は男の子』なんだと自分に言い聞かせて、今は必死に涙を堪

えるべきだな。

「……。ありがとう…」

「遠慮はいらないわ。でもあなた、デュエルキングって大きな夢があるあなたは尊敬するけど、そう簡単になれるものじゃないのよ」「……。わかってるよ。このくらい」

大切な人と約束したこの夢。簡単じゃないってことくらい自分でも分かっている。でも、諦めきれないんだ。

「私だってプロリーグで挫折しそうになったことある…。自分の強さが突然無力だって感じちゃったからね。それでも私は堪えて自分なりに頑張ったから今の私がいるの。私のファンに何度も励まされてようやくこの道にたどり着くことができたもの。私だってユウタを応援するわ！だから頑張ってよ」

神崎さんに言われてようやく私の甘えだった性格に目を覚ました気がする。

「本当にありがとう…。僕、勇気が出てきたよ。それに君のおかげでこの学校での目標もできたんだ。あと、次デュエルするときは絶対に負けないから」

「べ、別にあんたのために励ましてあげたわけじゃないんだからね！」

「…ミカ…」

この学校に来てから最初に久しくなれた嬉しさのあまり、私は初めて神崎さんの下の名前で呼んだ。

興奮したあまり無意識の内に自分の性別を忘れて神崎さんの胸に跳びついた。

「ユウタ…」

神崎さんの体から直接、体温を感じるよ。あつたかいなあ…。

「ちよつと待った〜！私との約束忘れてない!？」
「えっ!？」

神崎さんは抱きついていて私を切り離すように手で押し返すして体同士のくっつきから離れさせた。

そういえば何かデュエル前に賭け事をした気がしたけど。

「ユウタは負けたんだから今日からあなたは私の彼氏でしょ。よろしくね!！」

「…っ…っ…」

「さっきいきなり私に抱きついて来てエッチなこと考えてたんでしょ。何でそんな悲しそうな顔をするのよ」

「エッチなことなんて考えてないよ！誤解だ…」

「じゃあまずは始めに手を繋いで帰りましょうね。ユウタ」

手を繋いでこのまま学校の校門を出た。私達は有名人なもんだから周りの視線がみんなこっちを見ていて痛すぎる。

私は人生で初めて彼氏ではなくて彼女が出来た。なんかもう、いろいろと最悪だ。

第3話 『XセイバーVSライトロード』（後書き）

作者もライトロード使います

ライラやシンクロモンスターに警告使わせて開闢や裁きでドカーンと今回と違ってネクガとか剛健入ってないから構築かなり違いますけどねw

Xセイバーはプレイングわからん

友達が使ってたから練習でTFやったけど、

ダークソウルのサーチ遅いのとカード単体の力不足でよく事故る
うまい人が使うとフォルトロ、ガド緊が回ったら即死するんだよな

第4話 『お尻の穴に注意』 (前書き)

これって遊戯王小説だよな…？

第4話 『お尻の穴に注意』

私達は美人プロデュエリストの神崎と手を繋ぎながら歩いている。神崎さんとのデュエルに負けていいなりになってしまった私。

顔を真っ赤にしながら私は懸命にこの場を乗り切ろうとしているが、歩いていると周りの視線がものすごく辛い。

「…。神崎さん…。僕、すごく恥ずかしいよ…」

「カップルなんだから手を繋ぐなんてあたりまえでしょ。それと、もう付き合っているんだから私のことを呼び捨てで呼びなさいよ」

強気なテンションで私と向き合っている神崎さんは異常だ。っていうより、私はまだ認めてないぞ。

私は見た目は男の格好をしていてもまだ女の恋心ってもんがあるんだから異性では好きにはなれないな。

「だからってこんな目立つところで手を繋ぐなんてやだよ…」

私は想いのままに告げる。それでも神崎さんは諦めるということ知らない。

「もうここまで来たんだから私達は友達以上の関係でしょ！」

「僕はまだ君のことは異性としてはまだ好きになってない友達としては好きだけど…。これ以上学校で厄介なことになるのが嫌なんだ。それに、僕のクラスの人に見られたら面倒だし」

「だったら、あなたは学校で目立ちすぎていると厄介なことがあるなら、こつやって手を繋げば他の雌猫ストーカーにユウタを諦めさせることができるのよ」

「それでも大胆すぎるだろ！ー！これ」

手を繋ぐのは恥ずかしいけどよく考えれば、確かに神崎さんと付き合うのは利点なことはあるかもしれない。

私はこの学校に入学して1日目で目立ってしまったことにより、クラスの女子の王子様ポジションになってモテモテになってしまった。

体育の時間の着替えをしようと私の裸を確認しに来るほど変態な連中だったな。この状況が続くといつか私が女だっということがばれるかも。

でも、私が超有名人の神崎さんと付き合ってしまったえば私のことを諦めさせるということが出来る。

しかも神崎さんは優しいし、面白いから友達としては好きなんだよね。なんていうか、私の学園生活充実してきたぞ！！

「お、お前ら……」

「宮城……。こ、これは誤解なんだよ。僕が神崎さんの言いなりになっているわけ……」

「じゃあ、何で手なんか繋いでいるんだよ！！」

やっぱり目立つからすぐにクラスの人に見つかっちゃったか。

驚いた顔つきで私の最初の友達になってくれた宮城は私のことを見つめている。

「このリア充め……。奈々川……。お前……。神崎のことを振ったのに何で付き合っているんだよ。女にまったく興味ないお前は俺と同じようにずっと童貞だと信じていたのに……。俺のことを裏切ったな

「!!」
「……………」

リア充？童貞？…。私に何か怒りながら話しているけど意味わかんないや。

でも、これで宮城が私のことを男だと信じてくれてるってことが発覚したな。でも、付き合っているってことが勘違いされるのはちょっと辛いけど。

「奈々川ユウタは私のミスレイプなのー。ねえー」

宮城をさらに挑発するかのように、神崎さんは私の顔にキスをするくらいの距離で綺麗な顔を近づけてきた。

このいやらしい感じて怖いな。我ながら女の恐怖を改めて感じる瞬間だった。

「ねえ。ミスレイプ。こんな奴置いてさっさと行きましょう」

私が可哀想だなと思っていた間に、神崎さんは手を引っぱってこの場を立ち去ろうとした。その時…。宮城は…。

「お前ら……。レイプ……。レイプ……。まさか奈々川……。無理やり大事な所同士を見せ合うエッチなことやったのかよ！」

……。宮城……。マイスレイプの意味違いすぎるだろ……。

「……。そんないきなり変なことはしないわよ。それより、まずあなたはスレイプの意味を辞書で調べたほうがいいわ」

「奈々川が神崎のことをレイプしたんじゃないかったのかよ……」

「まじめな僕がするわけないでしょ!!!」

変なことを言って場の空気をおかしくした宮城を見て神崎さんは呆れていた。スレイプとは奴隷って意味なんだけどね。

この空気を変えて話の流れを作るために私は……。

「そういえば、今日から寮生活が始まるんだったよな。宮城……」

「奈々川も寮生活するのか……」

「ユウタ……。寮生活するの……？マイスレイプとして私の家に泊まるんじゃないかったの？」

「泊まるわけないだろ!!!それに、その話は今聞いたよ」

私の家はこのデュエルが強い学校に進学するために離れたのだ。だから寮生活も同時にスタートするってわけだな。

もう、私には家族はいないし、この学校にいる間の3年間も離れてしまうから取り壊して貰うことになったんだ。

だからこの鞆にはパンパンに私の私服などが入っているから準備はできているんだ。

それに、生まれて初めての寮生活ってどんなものか知りたいしね。

「俺、奈々川と同じ部屋になれるといいなー」

「同じ部屋って……？」

「あれ？2人で1つの部屋ってこと知らなかったのか？」

同じ部屋…？あれ？部屋は別々じゃなかったのか…。
やばい…。初めて聞いたよ…。部屋が共同ってことはいろいろと
不便じゃないか！私の着替えはどうすればいいのよ。

「はあ…？私に喧嘩売ってるの？私のユウタはあげないわよ…！」
「俺が奈々川なんか狙うわけないだろ…！」

困るよ…。自分の部屋で安心して着替えができないってことにな
るとトイレで隠れてやるしかないじゃないのかな？
でも、何とかかなりそうなのかな…。寝てる間とか誤魔化そうと
すればいけるじゃないか！大丈夫だ！私、いける！

「奈々川。思い出したのだが人数の関係で2年生と同じ部屋になる
可能性もあるんだ」

「それがどうしたの？」

宮城は今まで嫉妬していたはずの表情だったのに急に怖そうな表
情に変わった。

何かあるのだろうか？と私は疑問に思った。別に2年生の先輩と一
緒でも私にはあまり変わらない気がするんだが。

「さつき聞いたうわさだけだな。2年生の堀内シリヤっていう先輩
に気をつけるってさ」

「…。なんだそれ!？」

変な名前の先輩だなと思ったが、どんなうわさ話かと軽い気持ち
で私は受け流した。

「その堀内シリヤさんはゲイらしいんだ」

「ゲイ？何それ？」

「夜中には気に入った男は腕力で物を言わせて掘りまくる変態に変わるらしい。これで今まで線の細い生徒がこの寮生活で何人も犠牲になっているらしいんだ」

宮城が恐ろしい顔で話していたが掘るって何のことなんだか…。犠牲になって話してるから危ない人なのか…。その堀内先輩って人は…。

「それがどうかしたのかい？」

「奈々川は女つばい顔だし、リアルファイト弱そうに見えるから掘られないように気をつけるよ。一応忠告したぜ」

「すまないが掘るってどういう意味なの？」

「はあ…。お前、こんなのも分からないのかよ。…。しょうがねえなあ…。教えてやるよ」

宮城は私に対して威張っているけど、そっちもさっきスレイプっていう単語の意味が分からなかったんだけどね。

「掘るっていうことはな！男のケツに男のチンコをぶっ刺すってことだよ！！」

私は卑劣な言葉を言われてしばらく声がでなかった。そんな変なことをされるわけないだろうとこのときは自分に暗示していたのだ

けど。

「僕がそんな危険な人と一緒に部屋なんて確立的にありえないだろ……。変な話を話さないでくれよ」

「俺はこれでもまじめに言っているんだぜ。あとで寮の担当の先生に自分の部屋から教えてもらえよ」

「恐ろしい話を私のユウタに話さないでよ！！こんな最低な奴と私のユウタが一緒に部屋になるわけないでしょ」

少し同様してるけど、大丈夫だ。

堀内先輩と同じ部屋にはなるはずがない。夜中に襲われてしまったら私が女だつてということがばれてしまうからな。

「面白い話だったから話ただけだよ。奈々川、お尻の穴を狙われないように気をつけるよ。じゃあな……！」

私はあれから宮城と神崎さんと別れた。

宮城が言っていたお尻を狙われるという怖い話でちょっとだけ恐怖心が残っていたけど、ありえないと私は確信していた。

堀内先輩が私の部屋と同じなはずないと自信持って自分の寮に移動し、私の部屋の扉をゆっくりと開けた。

扉を開けると大きなスポーツ体系の男性が私を迎えていた。この人が私と1年間一緒に部屋ということになる。

「…。やあ。君が奈々川ユウタ君かい？」
「そうですけど…」

怖かったので薄い声で返事を返す。だってこの人の第一印象としてすごい毛むくじやらなんだ。

ワイシャツから見せているかのように見える胸毛が野獣のライオンっぽい。っていうかかなり怖い…。生理的に無理だ。

「私の名前は堀内シリヤっていうんだよ。ま、これからずっと同じ部屋だからよろしくな！」

嘘でしょ……。私は驚きを隠せなかった。悲鳴を上げたいと思ったが初対面の人にこんなことを言うのは不適切だ。

この男が宮城が言っていた危険人物の堀内先輩だなんて…。

「どうした？顔色悪いぞ」

詳しいことを聞いてもらったけどこの堀内先輩は男の人が好きらしいんだ。私は今、男の格好をしているから…。危険ってもんじゃない。

「まあ、入寮したてでわからないことがあると思うが、気軽に私に聞きたまえよ。たとえば私の好みとか…」

「いいえ…。一切興味ありません」

とりあえずは下手にフラグを立てる会話をしては駄目だ。

私はまったく先輩に興味を示さないように冷たい視線で送れば大丈夫なはず。そう甘く考えていた私は馬鹿だった。

「ちなみに私の好きなのは…」

「君みたい可愛い男の子」

「ちっ…。会って早々いきなり告ってしまっただぜ…」

先輩は額を赤く染めながら告白した。何かもういろいろと大変なことになってる。

こんな最低な奴と1年間一緒の部屋なんて死んでも無理だよ…。逃げられるはずもないじゃないか。

「君と私はこれから毎日毎日毎日毎日毎日一緒に暮らすのだから仲良くしようじゃないか。君のような可愛い男の子とこんな狭い部屋でお互いに匂いを嗅ぎながら1年も暮らせるなんて…。まるで夢のようだよ」

乙女のような台詞を吐きながら私のことを考えずにぼかっとしてる。私、いろいろと人生詰んでる…。

「おっといかな。時間を忘れるところだったよ。奈々川君。そろそろ1年のお風呂の時間になる頃だ。君も入ってきたらどうだ？この続きはあとでしようよ」

お、お風呂って……。

この寮には男性しか集まっていない。女性寮は男が入って来れないようにここから反対の数キロ離れている場所にあるらしいんだ。だから、普段男として生活する私はこの男子風呂しか入る道しかないってことになる…。

それでも変な人と言われないように私は近くまでやってきた。でも…。男の人と一緒に入るなんて無理だよ…。

「おっ…！奈々川じゃないか！お前も風呂に入りに来たのか？」

私、本当に付いてないよ…。よりによってなんで宮城が来るんだよ。

しかも宮城が現れた勢いで私は止まっていた足が動いているし…。確実に風呂に向かっている…。

「聞いてなかったが、お前は誰と一緒にの寮になった…？まさか堀内先輩ってわけないよな」

宮城が冗談で言っていたつもりだったんだけど、実際はその通りなんだよな…。

私は正直に話した。もちろん開始早々狙われているってことを伝えた。

「ハハハ。笑えるぜ。本当に堀内先輩と一緒にいるんだってな。聞いた先輩達の話によると堀内先輩の被害にあつた子は鬱病に掛かって学校を辞めちゃったらしいぜ」

「……。僕、警察に訴えて来るよ……」

私にはデュエルキングになるという夢があるのにこんな恐怖で夢を壊されたくない。

それなのに何でこんなことで人生詰み掛かっているんだろう。やっぱり誰かに助けを呼ぶしかないのか。

「無駄だぜ。奈々川。男は女と違って訴えられるっていうのは滅多にないんだよ」

宮城が言ったこの台詞……。ここに来て異性の不便を感じてしまうなんて……。私が今、女の格好をしていたら確実に訴えられたのに……。

「でも、お前には神崎っていう彼女がいるんだよな。素直に付き合っている人がいるって言えば諦めさせてもらえるかもしれないぜ」

話の途中だが、遂に青い男性をあらわすマークの場所に付いてしまった。

宮城がお風呂場の扉を開けるとたくさんの人が見える。それもみんな裸で男らしいゴツイ体つきの人がばかり。

私は体がフリーズしてしまった。こんな場所で私が裸を見せれば女だっていうことを隠し通すことなんて確実に無理だろ。

「どっしたんだよ。奈々川！早く閉めないと開けっ放しで寒いだろ」

宮城は平然として私の立場を考えずにゆっくりとベルト、ズボンと順に脱いでるとトランクスひとつになった。

「きゃああああああー……」

そして私は宮城が最後の1枚のパンツを脱いだあとに見えた男の人の大きな物を見た瞬間、悲鳴を上げて無意識の内に逃げていた。風呂なんて絶対に入れないと確信した瞬間だった。

「お帰り。早く帰ってきたけど、ちゃんと私のために体を温めてきたのかい？」

私はこのまま自分の寮に戻ってきた。

堀内先輩が私を待ち望んでいたかのように歓迎していたけど、いつ襲われるかと考えると油断はできない。

ここにも私の居場所というものはない。

それにお風呂に入らなかつたから、忙しい学校生活1日の溜まった私の体が汗臭くて変な感じがする。

これからずっと私はお風呂に入れないのかと考えてしまおうというマイナスなことしか考えられない。

「もう、今日は疲れたから僕は寝ることにするよ。おやすみ……」

もう、やけくそになった私は寝ることにした。

この問題はとりあえず明日考えようと思って自分のベッドに登っ

て目を閉じた。

これから私のこの学園生活はどうなるのだろうかとずっと私は考える…。

私がデュエルキングになるっていったから女を捨てて男になったのに、不便すぎてもう嫌だよ…。

でも、大切な人との約束を守るために諦めてはいけないから、弱音を吐いてはいけない。

お風呂の問題は、朝早く誰もいない時間に速やかに入ってすぐに終わらせれば大丈夫なはずさ。

あと、彼女になった神崎さんと、今私と一緒に部屋の堀内さんに不意を付かれて女だっことをバレないように常に気をつけないと。こんな生活やっていけるのかな…？

「もう眠りに着いたかい？奈々川君！？」

「！？」

急に部屋を真っ暗にし始めて堀内先輩の声が聞こえた。周りが静かになったのを確認した先輩はありえない行動を起こした。

それは、私の寝ているベッドの階段を上ってきたのだ。いきなりなことだったのでとっさの判断ができなかった私。

先輩は動きが遅い私を熊が襲うかのように急に、私の口を押さえ付けた。

「んっ」

「はあ…はあ…。暴れても無駄だぞ。君との体格差を考えろよ。私は柔道で全国7位の実力がある。それに全国デュエル大会でも4位の成績を持っているんだよ」

大声を出そうとしても口を封じられた私は声を出すことすら許されない。抵抗できない私は涙が溢れることしかできなかった。

しかも私の上に馬乗り乗っかってさらに追い詰めようとした…。絶望と最悪なことがこれから起きることしか予想できない。

「心配するな。今日はお前に気持ちよくなってもらっただけだ。不本意だが君が暴れると暴力で黙らせるしかない」

ゴツイ体で思いつ切りグーの態勢で私を脅した。

私の外見は男でも本当は女だから勝てるはずもない相手を見て怖いという感情しかない…。

「まずは泣いている可愛い君のパンツを脱がして可愛いお尻を拝見させて貰おう…はあはあ」

先輩が私のパジャマに手を掛けようとした。

このままでは私が女だっということがばれる最悪な結末になってしまう…。

私は涙を大量に浮かべながらこの絶対絶命のピンチの中、自分の昔の過去を思い出す。

第4話 『お尻の穴に注意』（後書き）

この小説って日常が多いな…。

日常よりデュエルシーンのほうが閲覧数上がるってことはアクセス調べて事実だった。

でも、このタイトルで釣ろうと考えていたけど、どうなることやら。

第5話 『男としての勇氣』（前書き）

4話はいろいろとすごかった。

あのタイトルでお気に入りが一気に増えて電車の中でニヤニヤしてました。

では、今回もよろしくお願いします。

今回、5dsのあの人が登場するけど

原作キャラは性格崩壊とか設定が合わないかもしれないから嫌なんだよな…。

転生シリーズとか書いている人は尊敬します。

ってかキャラ合ってたと言ってくれ。

第5話 『男としての勇氣』

私はホモとうわさされている大柄男の堀内先輩と同じ寮になっていきなり襲われてしまった。

馬乗りにされて身動きができない私…。私のお尻を見ようとズボンを下ろそうとしてくる。女とばれるわけにはいかない私は何としても阻止をしなければならない。

口を押さえつけられていたけれども私は何とか振り払ってして小さい泣き声で言葉を発しようとした。

「…………。僕は好きな人がいるんだぞ…。付き合っている人がいるのに先輩はどうして僕を襲うんだ…」

「はあ…。はあ…。付き合っても私は君のことが好きだよ。ハアハア。今から奈々川君を気持ちよくさせてその女の子より私のほうがいってことを証明してあげよう」

「うう…。やめてくれよ…」

「叫んでも無駄だよ。みんなもう寝る時間だからね。大きな音を立てても今まで助けに来てくれる人なんていなかったんだ」

いくら暴れようとしてもしつかりと先輩の大きい体を駆使して私をホールドして動けなくさせられている。

「ホラホラ。私のアソコは君のおかげでこんなにも興奮しているんだよ…。今から君のお尻に入れてあげるね……。ハアハア」

「いやあ…………」

先輩のズボンの上からなのに股間部分が大きくなっているのがわかる。気持ち悪いよ…………。

まだ好きな人すらできていないのにこんな所で変なのを入れられ

るなんて死んでも嫌だ……。

男の人に恐怖を抱いてしまった私は、これ以上動いても無駄だと思っただけは自然に抵抗する気力もなくなり素直に受け入れる態勢になっただけだ。

「そうだ……。これでいい」

思うがままに先輩にズボンを下ろされてしまう。そして神崎さんにも見られたものと同じ女性物の下着があらわになった。

「何で君は女物の下着をしているんだい？」

恐ろしさに言葉が出るはずもない。

「言わないとぶん殴るぞ!!」

「言います!! 言います……。だから殴らないで……」

怖いと思っても言わなければならぬ。本当の真実を言わなければ確実に変なことをされてしまう。

「僕は実は女なんだ……。だからもうやめてくれよ……」

「ほう……。君は女の子なんだね!! 私には女の子は本当は好きなんだよ、モテないから男の方が好きなんだよ」

終わった……。こんな形で人生を幕を閉じるなんて……。でもこれ以上なんかにされるよりはマシな気がする。怖い思いだけはもうしたくない。

「女装が趣味なんて私の好みじゃないか！！ますます君のことを気に入ったよ…ハアハア」

「え…っ!？」

変態だ。キモイ。キモイ……。

こいつ…。確実に私のことを男だと信じきっている……。私がこのまま襲われてしまうなんて目に見えている。どうすればいい…。そうだったな…。私は今、男の子なんだ……。男の子だったらどうすればいいの?…。ユウタお兄ちゃんならこうするはずだ……!

「ぐわあ…」

私の下着に見惚れながらボーっと油断していた先輩に私は股間に思いつきり足を上げて蹴り上げた。

いつもここに偶々当たると、お父さんとかお兄ちゃんが何で痛がるかわからなかったけどここが男の人の弱点っていうのがわかる。

そのまま先輩は2段ベッドの上から落ちた。叩きつけられる生々しい痛そうな音があった。

「ぐ…っ…っ…っ…。馬鹿な…!」

お腹を抑えながら必死に苦しそうに倒れこむ先輩。

痛そうに殺すと訴え掛けているかのように目で私を見つめている

けど、今までの私の苦しみと比べればどうってこともないはずだ。
…。私は今、男だ！…。女の子みたいに泣き叫んで助けを呼ぶわけにはいかない。自分で解決しなければならんだ！！

「驚きましたか？ 僕は中学生の頃バスケット部のエースでダンクをよく決めていたから脚力と瞬発力には自信があるんですよ」

「うう……」

「一応、先輩はルームメイトだから仲良くなりたいたいと最初は思っていました…。だからもうしないって約束してくれれば許してあげますよ」

これから1年間、先輩はここでずっと一緒になるんだ。

トラブルを起こさないように私に誓ってくればここでまともな1年間を暮らせる。だから先輩には私に襲わないと誓ってもらいたい。

「…。君の一撃は気持ちよかったなあ……。だから私はこの痛みが無くなったらあとで今度は君を襲うよ」

どうやら分かってもらえないみたいだな。

「せっかく忠告したのに……。そうじゃないなら先輩……。さっき言ってもわからないなら暴力でいって言ってましたよね……。だったら相手をしてあげますよ！」

本当は力で勝てないってというのがわかっているはずなのに……。怖いってわかっている。

なのにここで弱気を吐けば確実にまた襲われてしまう。だからここで私の攻撃をやめるわけにはいかない。再びあいつの股間を蹴ってやる。

「ちょ、ちよつと待ってくれ…。私との体格差を考える…。私は柔道で全国7位だぞ…。それに高校デュエル大会でも4位の成績を持っている…」

「そうやって僕に口で言っても無駄ですよ。わからないなら僕が黙らせてあげましょう」

私は思いつきりあいつの顔面を蹴ろうと構えたその時…

「わかった…。わかった…。落ち着いてくれ…。今は私は戦えないからデュエルで決着をつけようじゃないか！」

先輩は必死なのは顔でわかる。先輩は股間の激痛に走っているから今、リアルファイトで勝つことができるのは私だ。

だからデュエルで決着を付けるってわけだな。面白い…。私はデュエルキングになるからこんな最悪な野郎に負けるなんてありえない！！

「いいでしょう…。先輩を潰してあげますよ。これで勝ったら先輩はもう僕のことを襲わないって約束してくれますね！！」

「…。ハハハ。奈々川君は正直だな。私が全国4位のつわものだった、さつき親切に言ったのに忘れたのかい？ 私のアソコは痛くても決して負けることはないのだよ」

「試してみないとわからないさ…。それに今の僕は負ける気がしない…！」

「決闘！！」

ユウタ LP4000

堀内 LP4000

「先行は僕から貰うよ」

「いいだろう。先輩が後輩を譲るのは基本はそうだからな」

先輩が格好付けてそう言っていたけれども、今の私の手札は神手札と自慢できるほどに強い。これなら負ける気がしない。

「まずは『X-セイバー エアベルン』を通常召喚！！」

召喚の掛け声と共に手始めに猫背気味のスタイルに爪型の武器のモンスターを出現させる。

このカードは戦闘ダメージを与えたら相手の手札をハンデスする効果を持っているけど、先行1ターン目だから関係ないか。

「さらに手札の『XX-セイバー フォルトロール』を墓地に送って『ワン・フォー・ワン』を発動。効果でレベル1のモンスターをデッキから特殊召喚できる。現れる！『XX-セイバー レイジグ
ラ』！」

私は爬虫類の顔をした獣戦士を呼び寄せる。

「ほう…。君のデッキはXセイバーデッキか…。奈々川君は可愛い顔をしてそんなデッキを使うんだな」

「さらに『レイジグラ』の効果により、今捨てた墓地の『フォルト

「『ルール』を手札に戻す。そして『フォルトルール』を特殊召喚!!」

Xセイバーが2体以上いるので私は2400打点のモンスターを呼び寄せる。このカードはXセイバーの展開を支える強力効果を持っているんだ。

「そして僕はレベル6の『XX-セイバー フォルトルール』にレベル3の『X-セイバー エアベルン』をチューニング!!」
「先行1ターン目にシンクロ召喚…。本当にそのプレイングは正しいのだろうかね?」

先輩は私に動揺させようとする作戦みたいにいやらしく言ったよ
うだけど無駄だ。この展開はさらに進む!!

「剣の主の王よ。我が元に降臨して巨大な剣を抜け!シンクロ召喚!現れる『XX-セイバー ガトムズ』!!さらに2体目の『フォルトルール』を特殊召喚!!」
「なんだと…」

「『フォルトルール』の効果で墓地の『レイジグラ』を特殊召喚!さらに『レイジグラ』が特殊召喚に成功したことでもう1体の『フォルトルール』を墓地から手札に加えるよ。そして加えた『フォルトルール』も特殊召喚」
「モンスターが埋まった…。何をするつもりだ…」

手札の消費を5枚使ってフィールドを先行1ターンで埋めた私。
例え『ブラックホール』を握られていたとしてもこれから見せるのは地獄だ。私を襲い掛かったことを後悔させてやる。

「『ガトムズ』の効果によりフィールドのXセイバーを墓地に送ること
で相手の手札のカードをランダムに捨てさせることができる!

！『レイジグラ』をリリースして効果発動！！」
「…。私の『ブラックホール』が…」

やっぱり握っていたか『ブラックホール』…。これで怖いものはなくなつたわけだな。

「さらにハンデスをしてやる！！効果使用済みの『フォルトロール』をリリースして『ガドムズ』の効果！！そして使っていないほうの『フォルトロール』の効果を使用して『レイジグラ』を蘇生！効果で再びもう1枚の『フォルトロール』を回収！再び『フォルトロール』を特殊召喚！」

「…。無限ハンデスループ…。私の手札が全て……」

無限ループを駆使して私はこの流れを繰り返して先輩の手札を全て吹き飛ばしてやった。これで相手の戦意は喪失してしまつただろう。

手札が0枚になつたつてことはこの状況はたとえ天才でも逆転することなんて不可能だ。

「私はカードを1枚伏せてターンエンド」

先輩の手札は0枚とはいえ、もしものことがあるかも知れないので念には念をリバーズカードを伏せて守りを固める。

ユウタ

LP：4000

手札：0枚

場：モンスター

XX - セイバー フォルトローラー×2
XX - セイバー ガトムズ
XX - セイバー レイジグラ

魔法・罫

伏せ1枚

堀内

LP:4000

手札:0枚 1枚

場 : モンスター

なし

魔法・罫

なし

「よくも私の手札を全てなくしてくれたな……。私のターン！ドロー！！」

後攻1ターンで理不尽なターンが来て先輩はかなり焦っているみたい。

「私は手札の『深海のディーヴァ』を召喚！さらにデッキより『深海のディーヴァ』を特殊召喚！！」

先輩はチューナーとチューナーを並べるといって謎プレイングをしてくる。

このままではシンクロ召喚はできないというのにどうしてなのか？私を感じたことはこれではない別の召喚方法か。

「『深海のディーヴァ』でオーバーレイネットワークを構築！！エ

クシーズ召喚！」

2体の同盟モンスターが突然ブラックホールのようなものを作り出して何かが生まれようとする。現れるのは…。

「これで時間稼ぎだ！！現れる『ガチガチガンテツ』！！」

「じゃあ僕はそれにカウンターして『神の宣告』を使うよ」

ユウタ LP4000 2000

「そんな…。これではもう何もできないではないか！」

「残念でしたね〜。先輩！手札がなくてこのターンがこれ以上進められないなら勝手に僕のターンに移動しますよ！」

「…。こんなはずでは…」

私はこのまま残ったモンスターでがら空きな堀内先輩のフィールドに一斉攻撃した。

手札も0で自分から肥やしてもいない墓地も信用ならない守りであつという間にライフは0になった。

堀内 LP4000 0

「嘘だ…。嘘だ…。嘘だああああああ。私は全国大会4位の實力なんだぞ。こんな簡単に負けるなんて…」

「たまたま僕の手札がよかったからですよ。逆に僕が後攻だったらこのデュエルはどうなったかはわかりません」

堂々と落ち込んでいる先輩に決め台詞を言った。

確かに私の感想通りに確実にわからない試合になつていたはず。先行無限ハンデスが成功しなかったら私は負けていたかもしれない。勝負は決着が付いたんだ。結果が全てだ。私は勝つたんだ！！

「約束通りにこれ以上僕に何もしないって約束してくれるかい？わかったならもう寝るよ」

「……。私と一緒に体をくつつけながら寝るのかい……。ハアハア」
「だから……。もうこんなことをしないって約束しただろ」

鼻息をしながら私に近づいてくる。かなりキモイ表情をしているから余計に腹が立つ。何回言っても堀内先輩はわかってくれないよ。うだな。

「私はもうアソコの痛みは回復したのだよ。もう痛くないから触ってもいいよ。奈々川君！！」

「うわああああああああああああ」

先輩が変なものを近づけてきたから私はとっさの反射で無意識の内に再び急所を蹴って部屋から逃げ出した。

さつきより力をあげて蹴り上げたからさつきより痛そうだけど後ろを振り返らなかつた。先輩が追っかけてくる気配もない。

男のものを見せてきたからトラウマになりそうだよ……。こんな気持ち悪い人と絶対に同じ部屋なんてもう無理だ……。ありえない。

これから一体どうすればいいんだろう……。私……。居場所がないよ……。もあやだよ……。

こんな辛い思いをしながらも私が男装している理由はちゃんとある。決して私は女が性的に好きな変態とか、男に近づくために化けているわけでもない。

今からかなり昔に私の父はあの伝説の社長の海馬瀬戸が主催したバトルシティに参加した。

父はかなり荒れてレアカードを強奪する集団の『グルーズ』という組織に入り、いろいろと悪さをしていたらしい。

柄の悪い連中とともに裏でカードを弱い物から盗み、カードを複製したり裏ルートで売ったりするなどの行為をよくした。

そしてバトルシティに参加した父は、のちの初代デュエルキングになる武藤遊戯と戦った。

私の父は武藤遊戯を追い込むものに成功したものの最後の最後に逆転されてしまって負けてしまった。

このデュエルはグルーズのボスが命令し自分の死を掛けて戦っていた為に、これで人生は終わると確信した。

しかし武藤遊戯は命乞いをした父を助けてくれた。助けて貰ったものの、父はそのまま精神的ショックを受けることになった。

優勝したのは決勝で戦ったグルズのボスに勝った武藤遊戯と世間に知らされていたらしいが、それでも父の精神は復活しない。

おまけにボスを失ったグルズも世の中に完全に消し去ってしまった。世間はこれが歴史とともに忘れ去られたしまったようだ。

何ヶ月か立つてまだ若かった父はまじめに工場関係の仕事で働きたしたものカードに対する未練は諦め切れなかった。

若い時の黒歴史が心残りだったために、父はこのあとの人生は辛いままだったので死を望もうとしたんだけど、そこで私のお母さんになる人であったんだ。

その人はかなりの美人で積極的に辛い自分の為に嫌といわずに優しくしてくれた。そして一緒に暮らすことになったんだ。

母も同じく通っていた学生時代に、世界を救って伝説を残した遊城十代と一緒に学んでいたらしい。

父も母もお互いにカードを趣味にしていたために気があっていた。だからこのまま結婚して子供を生んだんだ。

そこで私が生まれた。

双子だった。私とそっくりに一緒に出てきたのは男の子。ユウタとナナとお母さんは付けてくれた。

私達が大きくなるにつれて時代は大きく代わりだしてやがて、Dホイールと呼ばれた大きなバイクで行われるライディングデュエルというものが流行りだした。

そして私とお兄ちゃんから歳になってデュエル・オブ・フォーチ

ユンカップが開催されて家族4人で行くことになった。

最初は誰もが圧倒的な強さで見せ付けてくれた前回のキングのジャックアトラスが勝つと期待されていたが、不動遊星という人物が優勝した。

この人はメーカー付きで最初は嫌われていたのに優勝したとたんに熱い声援が送られた。

私とユウタも最初はジャックを応援していたのに前代未聞の優勝者があまりにもすごくて、こっちに私達も感動して流されてしまった。

「すげえー！ー！。不動遊星って人、顔に変なマーク付いているのに優勝しているよー」

「何度も何度も、お母さんは言ってるでしょ！人を馬鹿にするのはやめなさい！ユウタ！ー！」

「ちえー！ー」

ユウタはお母さんに怒られて軽くゲンコツされた。今思うとこの時が一番楽しかったんだな…。

この時のお兄ちゃん活発な男の子だったためによくお父さんとお母さんに怒られていたのが印象だった。

「ナナ、これからデュエルキングのふどうゆうせいと握手してくるっ」

興奮した幼かった私は興奮のあまりに勝手な行動を出て座っていた席から離れた。

「ずるいぞ！ナナ！！俺も不動遊星に握手してもらうんだよ！待てー！ー」

「コラ！！ナナ！ユウタ！またお母さんを怒らせるとおやつを抜きにするわよ！！」

おやつを抜きにすると言われて足を止めた私とお兄ちゃん。

勝手に子供達だけで移動するからお母さんは怒っていたけれどもそれでもお父さんは違って優しく話しかけてくれた。

「ナナ、ユウタ。お母さんに怒られてもいいから行くんだ。お前達は夢があるんだからお父さんの昔のようになってはほしくない。子供の純粋な気持ちは大切だぞ」

「お父さんのほうが大好きー」

「早くしないと握手してもらえなくなるかもしれないぞ。ってそれより握手なんかしてくれるかわからないけど…」

私はそのままお父さんの大きな足に飛びついた。厳しかったお母さんと違って私達を大切に思ってくれる。

それにくらべてお母さんはデュエルアカデミアの教師をしていたために、とにかくうっさくて私は嫌いだった。

「やーい。俺はナナを置いて先に行ってくるぜ。じゃあなー」

「待ってよ…。お兄ちゃん！！ナナを置いていかないで…」

釣られた私もお兄ちゃんと一緒に席を飛び出した。だがすぐに私はお兄ちゃんを抜いた。

「くそ…っ」

後ろからお兄ちゃんの悔しがる声が聞こえたのはわかった。双子なのにこの時から私のほうが駆けっこは早かったから抜されることはなかった。

「お兄ちゃん。お兄ちゃん。私と握手してよ!!」

いる場所は分からないのに、関係者以外立ち入り禁止って書かれた場所を無視して適当な場所を走っているとかあの人は見つかった。

ちょうど廊下で1人で歩いているところを私は見つけたんだ。

この時は偶然偶々だったのですごいと思わなかったのだけど、あとで私とお兄ちゃんの夢を大きく変えることとなる。

「ああ…。握手くらい構わない…」

「やったー」

動揺することもなく私の勝手なことを聞いてくれて嬉しかった。

大人の大きな手の中に小さかった私の手が結び合って握手をしてくれた。

この人の手の腕前が優勝したんだと思うとすごくワクワクした。

この感じは今でも忘れてはいない。

「あ、ずるいぞ!! ナナの奴!! 俺より先に握手するなんて!!」

「……!!。そんなに君は焦ることないさ…」

いきなり後ろから現れたお兄ちゃんがちょっと私達が似すぎてピツクリしていたように遊星はリアクションしていたけれど、それでもチャンピオンらしく接した。

そしてお兄ちゃんにも私がしたと同じように握手した。そして調子に乗ったお兄ちゃんは遊星にこう言った。

「俺、絶対お前を絶対倒してデュエルキングになる…!!」

「……俺を倒すか」

「私よりデュエルが弱いお兄ちゃんが勝てるわけないじゃん!!」

「うるせえー!。いつかナナも遊星も倒してデュエルキングになるんだよ!」

お兄ちゃんの適当な言いがかりに、キングは一瞬呆れた顔をして返事をすると思っただが、私が思ったことと反対のことを言った。

この冷静な性格がすごいかつこよかった。今でも私は遊星をとても尊敬する。この冷静な諦めない性格が大会優勝に繋がったのだと思う。

「その君の大きな夢はすごいと思うな。俺も君と同じように大きな夢があるからここに来れたんだ。ここまで来れたのは諦めなかったからだ。君も頑張ってデュエルを強くなるんだ。そうしたら相手をしてやる」

「えー!。今、相手してくれるわけじゃないの?俺の最強超上級モンスターデッキでここで倒すはずだったのに!」

「お兄ちゃん、そのデッキ使って一度も私に勝手ないでしょ!だから遊星に勝つなんて無理無理!」

「だから、そのことをこいつの前で言うなよ!」ナナの馬鹿!」

「君たちは兄弟そろって中がいいんだな。家族も兄弟もない俺に取ってはうらやましい…。君たちは絶対になれそうだ。その純粋な目が俺をそう思わせる」

「へへへ。俺は絶対にデュエルキングになるぜ！！」
「お兄ちゃんがなれるわけないでしょ！！！」

お兄ちゃんは遊星に言われて調子に乗った発言に私は馬鹿にしたように言った。

それでも元々私より強気な性格だけで、実際は才能がないお兄ちゃんがデュエルキングになれるはずもないと思っていた。

第5話 『男としての勇気』（後書き）

まさかの遊星登場。

いろいろと主人公の目標のために本編に関わってきますよ。

そしてデュエルシーンのXセイバーは今回の話のようにリアルで無限ループされてすごいトラウマ。

それなのに今流行っている形は無限ループしない型なんですよね。

ハンデス特化のほうが強そうなのに…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4494x/>

ナナナナナナナナナナナナナ

2011年10月21日09時11分発行